

心の原風景



第一生命経済研究所 取締役
松下 公勇

仕事の関係で、かつて家族とともに、沖縄県那覇市郊外の住宅街に住んだことがある。今でも時々、何気ない夫婦の会話にあの当時のことが話題になる。

長男が小学校三年、次男が一年生になる春に着任した。転居の荷解きの最中に息子がオカヤドカリを見つけてきて大騒ぎした。初めて海に連れて行ったときの第一声が「お父さん、水道の水みたい！」だった。学校の父親参観では、生き生きとしたクラスの子たちの目の輝き、表情が強く印象に残った。息子たちは勉強しなかったが、放課後いつも近所のガキ大将に連れられ夕方まで遊びほうけていた。町内の行事で、子どもを交え、隣近所の人たちとサトウキビから砂糖を作った。地区の運動会にも家族揃って参加し、ひと時交流を深めた。そして3年があつという間に過ぎ、また転勤で本土に戻ってきた。

転入した小学校の先生には、保護者面談時「転入してくれ助かります」と言っていた。なぜかと問うと、担任曰く「勉強は少し遅れていますが、クラスの雰囲気が変わりました。本当に良かったと思っています」「子どもたちをみていて、前から何かおかしいと感じていました。みな同じ表情をしているものですから」とのこと。このとき何となく、分かるような気がした。そういえば我が家の息子たちの表情も、新しい学校に慣れないせいかどうか、何となく沖縄に居る時と比べ、違っていることに気づかされた。

豊かなありのままの自然、身近な遊び場所としての広場や森、近所のガキ大将とちびっ子ギャング達、一日は限りなく長く、刺激的で変化に富んだ日々、そして隣近所

の人たちとの交流や地域コミュニティの存在、これらは沖縄と言わず、かつて誰でもが経験した、どこにでもあった、心の原風景である。こういう中で子どもたちは、学び育っていった。豊かな個性が、広場・森という空間で、ともにぶつかり合い、その中で多様性を受容し、協調と助け合いの大切さを身に着けていった。森は創造力と想像力を育んだ。一個の個性は他の個性に色々な刺激を与え、互いに共振し合い、独自性を身に着けていった。

今は、画一的になり、同質化し、逆に異質なものを強く排除しようとする傾向があるようだ。しかも外に向かつては扉を閉ざし、内に縮むようになってきているようにも思う。いじめ等の問題もこの延長線上にあるように思えてならない。今の時代、もはや子どもが子どもであることすら許されない時代になってしまったのか。

そうかといって、幼い頃の原風景を今の時代に再現することは、不可能であるしあまり意味を持たない。なるほど、官・民間問わず、育児・子育て支援に関して、「児童館・学童保育」を始めとして「つどいの広場」や「子育て支援センター」、「ファミリーサポート制度」など色々の装置があり、地域全体で子育てを支援する基盤の整備が図られている。一方では自然の中で子どもたちを過ごさせる「森の幼稚園」活動が広がりを見せている。子どもを森で保育することによって、協調性、耐久力、集中力、創造性などが養われるという。親に対する子育て支援も重要だが、子どもの健全な育ちという観点にたった装置も必要であろう。

今回のレポートは奇しくも、子どもの生活、外出をとりまく環境等の問題を掲載した。今一度膝を折り子どもの視線でものを考えるきっかけとしていただければ幸いである。